
異星の日本国

流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異星の日本国

【Nコード】

N0718Y

【作者名】

流星

【あらすじ】

2012年1月1日、午前0時00分まさに年が変わった瞬間空港の管制塔では大騒ぎが起こった。なぜなら富士山上空を表示するレーダー画面が突然真っ白になったからだ。

そしてこの異変は国土交通省からすぐに首相官邸に伝えられ、航空自衛隊機による偵察が行われたその結果
判明したのは――

ブローグ ～日本政府の対応～（前書き）

ホールが確認されてから一年間の流れです。

ブローグ ～日本政府の対応～

2012年1月1日、午前0時00分まさに年が変わった瞬間、空港の管制塔では大騒ぎが起こった。

なぜなら富士山上空を表示するレーダー画面が突然真っ白になったからだ。

そしてこの異変は国土交通省からすぐに首相官邸に伝えられ、6:00に航空自衛隊機RF-4EJによる偵察が行われた。

そして高度10000mに直径10kmの黒い穴が確認された。

同日7:00NHKにて首相は緊急放送を実施、黒い穴を「ホール」と命名し、調査を行うとした。

しかし10000mという高高度のため調査はサッパリ進まなかった。

そんな1月16日、「ホール」より鳥の群れが飛び出てきた。

ブラックホールではないかという意見もあったために政府は驚いたが捕獲を命じ、調査した。

その結果、基本的な遺伝子の形や体の作りは同じだが種類は全くの新種であることが判明した。

そこで政府は米軍に協力を依頼して無人偵察機によるホール内部の偵察を実施した。

そして明らかになったのはホールの向こう側には現代とは別の世界があるという事実だった。

この偵察後、ホールが拡大、徐々に降下していることが判明、計算では2013年1月1日には日本全土を覆うだろうというものだった。

そして数々の実験と検証が繰り返された結果、日本は2012年1月31日をもって地球ではなく、ホールの向こう「異星へ転移するだろうということだった。

この事実を受けて政府は非常事態宣言を発表。
引き続き調査をするとした。

1月25日

無人偵察機による第3次偵察により
大陸が発見された。

又、都市および農村が数カ所発見された。
航空写真の分析により建物は中世ヨーロッパに近く文化もそのレベルだろうと予想された。

2月1日

国会は「日本異世界転移関連法」を提出し、2週間というスピード
可決された。

その概要は

- ・ 異世界に転移後、少なくとも2年は国民が飢えないように食料品及びエネルギーの備蓄をする。
- ・ 日本国内にいる外国人は11月までに日本に残るか母国へ帰るかを決める

- ・ 海外にいる日本人へは帰国を呼びかけると同時に最終決定は自己

責任

- ・ 海外の日本企業の工場を国内に戻す等であった。

又、本来ならば廃艦予定のタンカーやコンテナ船を世界中から買い取り、物資を乗せて貯蔵する。といったことも行われた。

しかし1番助けになったのは世界中からの支援物資だった。

これによりなんとか9月には準備が整ったのだった。

10月に入りホールはヘリコプターでも到達できる4000mまで下がり、大きさは日本列島の2/3まで広がっていた。

そこで政府は陸上自衛隊、特殊作戦群から成る特別派遣チームを編成した。

彼らの使命は向こうで情報収集をし、転移後の具体的な準備に役立てるコトであった。

特別派遣部隊紹介（前書き）

短くてすみません。

次回から本編に入って行きます。

特別派遣部隊紹介

・坪井翔平 二等陸尉 (特殊作戦群 特別派遣部隊 隊長) 9
ミリ機関拳銃を主に携行

・石田篤 二等陸曹 (特殊作戦群 特別派遣部隊 隊員)

・佐藤智幸 二等陸曹 (特殊作戦群 特別派遣部隊 隊員)

・黒川理 三等陸曹 (特殊作戦群 特別派遣部隊 隊員) 狙撃銃携行

・古井洋一 三等陸曹 (特殊作戦群 特別派遣部隊 隊員) M
INIMI担当

<CH-47JA> (通称: チヌーク)

乗員: 2名 (操縦士、副操縦士)

全長: 30.1 m (胴体長15.54 m)

胴体幅: 3.87 m

全高: 5.7 m

積載能力: 兵員30名

: 担架24と衛生兵2名。

巡航速度: 260 - 270 km/h

航続距離: 2,060 km

特別派遣部隊の活動？（前書き）

ようやく本編です。

特別派遣部隊の活動？

千葉県 習志野駐屯地

先程からチヌーク2機がその大きなローターを回転させている。そのため辺りはけたたましい騒音とダウンウォッシュに包まれていた。

「積み込み作業はあとどれくらいかかるんだ？」

そう質問したのは派遣部隊の隊長 坪井翔平二尉だ。

「ハッ！現在約半分の積み込みを完了していますのであと10分程です。」

こう答えたのは佐藤智幸二曹だ。

すでにチヌークには今回の調査に使う物資が積み込まれている。特筆する荷物では馬一頭と馬車がある。

いづれも現地での荷物運搬用に使うためわざわざ特別に用意したものだ。

もう一機では黒川理（三曹）と古井洋一（三曹）が石田篤（二曹）の指示で食料品と武器・弾薬を積み込んでいる。

今回の調査ではこの五人が現地で活動することになっている。

10分後。

物資の積み込みが終わり隊員が乗り込んだことが確認された。

そして二機のチヌークはホール向こう側へと飛び立った。

習志野駐屯地を飛び立った2機のチヌークは

、10分程飛行してホールへと入った。
その瞬間、一瞬だけ目眩がしたが特に異常はなく無事に異星の空へ
来ることが出来た。

「隊長！やりましたね！」「」

こう口をそろえて言うのは黒川三曹と古井三曹の2人である。

この2人、歳も階級も同じということでも仲が良いのだ。

「おい。まだ超えたばかりだぞ！少しは気を引き締める！！」

2人の発言に注意を促したのは5人の中で一番の年長者の石田篤二
曹である。

「そうだぞ。俺たちは情報収集の為に派遣されたんだ。固くなる必
要はないが緊張感を持つように。」

と隊長からも言われたので2人は返事をして装備の点検を始めた。

そうこうしているうちに降下ポイントまで5分となった。

「よし！降下は打ち合わせ通りに行くぞ！」

「了解！！！！」

特別派遣部隊の活動？（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしています。

特別派遣部隊の活動？（前書き）

特戦群による異世界での行動です。

特別派遣部隊の活動？

降下ポイントは事前に行われた航空写真から既に決まっている。

場所は街と街を繋ぐ太い道（街道）の中間点に程近い丘で、ここなら大型のチヌークでも降りることが出来るだろうということだった。また、付近に人家が無く発見される恐れも少ないと思われるからだ。

バラバラバラとローター音を響かせて目的地上空へ到達したチヌークはまず周囲を一周した後、後部ドアを開け徐々に高度を落とし地上まで20m付近でホバリングを始めた。

すぐさまロープを落とし、89式小銃を携行した黒川・古井が素早く降下し、続いて坪井・石田・佐藤が降り円を描く様に展開し安全を確保した。

そしてチヌークが着地し馬と幌馬車を下ろして物資を積み込んだ。

実はこの馬車、出発5日前に隊員立ち達の手で作られたまあ、早い話が「お手製」なのだ。

材料は習志野駐屯地近くのホームセンターで木の板と車輪、二スを買って施設科隊員の協力の元2日で作ったのだ。

馬車には20日分の食糧と重量のある機関銃やカールグスタフ及び弾薬、バッテリーに長距離用の無線機、馬の飼葉・・・色々と積み込んである。

こうして馬車に積み込みチヌークを見送り5名は初となる異星の地を歩き始めたのだった。

ゴロゴロゴロと規則的な音を立てながら馬車は進んでゆく。予想よりも道がしつかりしていたこともあり快調である。ゆっくり進む馬車には幌が掛けられている。濡れては困る物が多いので当然だろう。

その前後左右には隊員が付き護衛している。

隊員達の格好は普段の迷彩服では無く防弾ベストの上にヨーロッパ風の服装とマントを羽織った姿である。

目的は異世界に溶け込むためとマントで武器を隠すためだ。

隊員達の手にはそれぞれダットサイトとサイレンサーを装着した89式小銃が握られている。

「はあゝまさか異世界でコスプレをするとは思いませんでしたよ。」

呟いたのは石田二曹だ。

「しょうがないさ、迷彩服じゃあ怪しまれる。」
そう宥めるのは坪井隊長だ。

何気ない会話に感じるがこついった会話の中でも周囲からは目を離していない。

その時だった。

耳の無線機から先行している佐藤二曹から報告が入った。

『こちら佐藤、前方300mに黒煙が見えます。』

『こちら坪井、嫌な予感がするな、とりあえずその場で待機だ』

『了解』

「隊長、300mって・・・」
そう憂慮するのは石田二曹だ。

「わかっている。第1目標のα村だ・・・」

「ともかく急ぐぞ!!」

「了解」

「すごい煙だな・・・」
坪井が呟く。

「火事ですかね？」
と黒川が尋ねる。

「わからん、だがこれだけ大きな火事もないだろ？確か先の村は30戸位のはずだ・・・」

答えたのは佐藤だ。

『こちら古井、応答願います』

『こちら坪井、様子は？』

『どうやら盗賊の様です』

「」「盗賊!!!」」

坪井『詳しい報告を』

『はい、20名程の盗賊が村人を襲い、家に火をつけている様です。』

『了解した。至急戻って来てくれ』

『了解』

「隊長!どうするんです?」
黒川が尋ねる。

「どうすると言われてもな・・・」
そう言って頭をポリポリと掻き腕を組む。

「どのみちこのまま進めば発見されます!」

「わかっている。しかし・・・」

「盗賊に見つかれば攻撃を受ける可能性が高いです!」

「・・・」

「わかった。」

「隊員に危険があるなら介入しても問題は無いだろう。」
「それに村人を見殺しにはできん」

そう判断した坪井は指示を飛ばし始めた。

「方法だが、遠距離から狙撃で盗賊の頭を倒し、続けて射撃で1人ずつ倒すぞ。この際、絶対にこちらの姿を見られるな」

「また、誤射と伏兵には注意せよ！」

「了解！……！」

「散開！」

坪井の号令により二手に別れ盗賊を十字に射撃できる位置まで移動を始めた。

特別派遣部隊の活動？（後書き）

いかがでしょうか？

何かおかしな点やご意見ありましたら感想をいただけると嬉しいです。

特別派遣部隊の戦闘？（前書き）

盗賊に襲われた村の話です。

特別派遣部隊の戦闘？

モンバサ村

村の住人であるメアリー・テッドはいつもの様に家の畑で仕事をしていた。

すると森側の畑から「ギャー！！」という悲鳴が聞こえた。

何事かと数人で駆け付けると隣に住むワイズマンさんが切られ血を流しているではないか！

びつくりしたメアリーだったが、すぐに異変に気づいた。

そう、そこにはみすばらしい服装をした集団つまり盗賊がいたのだ。

「へへっ楽なもんだぜ！！」

剣を地面に突き刺し1人の盗賊が言う。

「おい！お前ら根こそぎ奪うぞ！！」

「おう！！！！」

頭らしき人物がそう声をかけると20人程の盗賊達は一斉に散らばっていった。

そして、住人を家から追い出し、金目の物を奪い、家々に火をつけて回り始めた。

皆、抵抗はしたものの武器を持った盗賊達に敵うはずもなく、たちまち追い詰められてしまった。

「ワツハハハハ！！！」

「抵抗するだけ無駄だぞ！！」

「もがけもがけ！」

等の盗賊達の罵声が聞こえる。

「ああ、神様！どうか助けて下さい！！」

メアリーを始め皆そう願ったその時だった。

ドサツ！！

いきなり倒れる盗賊の頭。

「かしらー！？」

と言うなり

グハッ！！

と声上げて続けざまに倒れる盗賊達。

そして数秒後には盗賊達は地面に倒れていたのだった。

メアリー達は何が起こったんだと周囲をキョロキョロと見回すが何も見えないのだった。

「特別派遣部隊サイド」

坪井の指示で二手に別れた5人は林の中で4人が89式小銃を、黒川一人がM24狙撃銃を構えていた。

「黒川。まずは頭らしき人物を撃て。」

坪井からの指示がとぶ。

『了解』

『各員、黒川の狙撃後発砲を許可する。黒川、射撃タイミングはお前に任せる。好きな時に撃つてよし！ただし外すなよ！』

『了解しました』

無線でのやり取りを終えて待つコト数秒・・・。

覗いた89式小銃のスコープの中で盗賊の頭が倒れるのが見えた。

『撃て！！』

号令の元4人は一斉にうち始めた。

パシユ！パシユ！

単発に設定した89式からサイレンサーによって抑えられた独特の発砲音が漏れる。

盗賊達はまたたくまに倒れ、数人が走って逃げ始めた。

しかしそれを黒川が逃さずうちとっていく。

戦闘は短時間かつ一方的に終わった。

坪井『村人に気付かれない内に下がるぞ』
と無線で言った時だった。

ガサガサ

「!？」

不意に後ろの茂みから盗賊の伏兵が飛び出て来たのだ。

しかし89式に装填中のマガジンは弾切れ、だからといって新しいマガジンを入れる余裕も無い。

とつさに判断した坪井は腰のホルスターから9ミリ拳銃（SIG P220）を取り出し撃った。

盗賊は数発くらい頭から地面に突っ込んだ。

「あつ！危なかった!!」

ホツとする坪井だが

『マズイぞ、今ではれたかもしれん。急いでずらかるぞ!!』

と無線機に叫んだのだった。

特別派遣部隊の戦闘？（後書き）

今後の参考にしていきますので
ご意見ありましたらぜひお願いします。

特別派遣部隊の戦闘？（前書き）

便宜上「戦闘？」となっていますが戦闘しません。ゴメンなさい m
（――） m

特別派遣部隊の戦闘？

村人に気付かれないようスタコラと逃げたはいいものの、5人は新たな壁にぶち当たった。

「隊長！！前方から騎乗した集団が近づいてきます！！」

定時連絡を馬車の中でしていた坪井は、無線機のレシーバーを放り出し、双眼鏡を覗いた。

そこには立派な鎧に身を包み、旗を掲げて馬に乗って迫る30人程の集団がいた。

「我々は自由貿易都市カイバル騎士団！その馬車！！騎士団の名の下に止まれ！」

不意に発せられた声、それを理解出来たことに驚きながらも坪井らは歩みを止める。

「お前ら！どこへ向かっている！？答えよ！！」

いきなりの命令口調に驚くもこの道を進んだところにある街だと答える。

「お前らの来た方向だが、盗賊が出たらしい。なにか知らんか？」

坪井はこの集団は盗賊を倒しに急いでいるのだと理解したが、ぶっちゃけ自分達が倒した後でもう遅いのだ。

盗賊のことを伝えるか決めかねていること数秒……。

「どうした！？知らんのか？・・・まさか貴様らか！！」

「！？」

双方で一気に緊張が高まる。

騎士団は剣を抜き馬車の周りを囲み始める。

こちらも念のためマントの下で89式のセレクターを「安全」から「連射」へと切り替える。

「ま、待て！俺たちは違うぞ！？」

「フツ、盗賊は皆そう言うんだ！」

「そんな横暴な！」

「では荷物を見せてもらおうか？さぞかし良いものを積んでいるの
であろう？」

「・・・！？」

荷台にあるのは日本から持ってきた物である。見せる訳にはいかな
いと、言葉に詰まった次の瞬間。

「捕えよ！！」

と一声されるなり一斉に掴み掛かってきた。

「抵抗はするな！！」

と坪井は叫び5人はマントの下で89式を奪われ、縄で縛られたの
だった。

特別派遣部隊の戦闘？（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

自由貿易都市カイバル　く解説く（前書き）

街の解説になります。

自由貿易都市カイバル　く解説く

コルデリア大陸の端、北西に位置し、3つの大門と1つの港をもつ自由貿易都市カイバルは今から約50年前に設立された新しい街である。

東西南北に約10km、人口30万と大陸でも有数の規模を誇る街だ。

それも「自由貿易都市」の名の下で発展したためだ。

様々な人種や品物が街には溢れるが治安も良いことで知られている。それは市民からの志願者で結成される騎士団のおかげである。

その為に騎士団は街の人々から敬意をもって接しられる1番の名誉職となっている。

そして、大陸では珍しく選挙によって選ばれた人物がトップに立つことでも有名な街である。

自由貿易都市カイバル　く解説く（後書き）

御意見・御感想おまちします。

カイバル？（前書き）

進行を少し早めました。

カイバル？

レンガや大理石で作られた立派な建物が並ぶ市街地。

その中心部のとりわけ大きいのは市庁舎と騎士団の建物だ。

捕えられた5人は騎士団の建物の地下牢で監禁されていた。

「マズいことになりましたね。」

不安を口にするのは佐藤だ。

「ああ、だが拳銃が取られなかったのがせめてもの救いだな。」

「騎士団員達の顔を見ると、どうやらこの世界には銃はないようです。」

坪井に続き古井が発言する。

「あの顔見ました？この棒はなんだって顔でしたよね。」

黒川が苦笑しながら言う。

「それよりも定時連絡だ。」

「既に1回していないんだ、もう連絡しないと手遅れになる。」

「・・・」

坪井の発言に一同は黙り込む。

なぜならば、定時連絡が2回途切れた時点で活動に支障有りと判断されて、仲間達（特殊作戦群）による救出作戦が行われることになるからだ。

「作戦が行われればこの街に被害が及ぶことに・・・」

「クソ！どうすれば！！」

坪井が苦悩している時である。

「釈放だ！！出る！！」

と急に腰にサーベルを差した団員がやって来て地下牢を出されたのだった。

「市庁舎」

「では、報告を聞きましょうか？ボーゼスさん？」

声の主、アダムズ市長は革製のイスに深く腰掛け、頬杖をつきながら促す。

「はい。盗賊出没の知らせを受けて我々が向かっていたところ、怪しい5人を発見し荷物の提示を求めたところ、拒んだ為、念のため捕えました。」

「なる程・・・」

「気になるのは彼らが持っていた鉄の棒です。」

「これをご覧下さい。」

そういつて差し出したのは取り上げた89式小銃だ。

「これは一体なんですかね？」

そついいながら手を伸ばしたところ

パシユ！！

「！？」

驚き飛び退く2人。

鉄の棒の先からは煙が立ち昇り、壁には穴が空いていた。

（一体なんなんだ？！！！！）

そう思った時だった。

「失礼します！！」

「隊長！！どうやら先程捕えた5人ですが盗賊では無いようです！！」

そういつてドアを開けながら飛び込んできたのは同じ隊に所属するハムレットだ。

「当の盗賊ですが、モンバサ村にて眠りこけているのを捕縛しました。」

そう報告を続けたハムレットだが、2人が尻餅をついているのを見て怪訝な顔をする。

「・・・・わわわ、分かった、彼らをここに連れて来てくれ。」

「はあ、分かりました。」

そう言ってなんだろうな？と小声でボヤきながら部屋を出て行った。

2人は立ち上がり、『コホン』と咳払いをした。
そして

「彼らはいったい・・・・？？」

と呟いたのだった。

カイバル？（後書き）

御意見・御感想をお待ちしています。

カイバル？（前書き）

誤解がとけました。

カイバル？

「失礼します。」

再び市長室へ来たハムレットだが、今度は例の5人も一緒だ。

入室した5人がまず感じたのは硝煙の匂いである。

「始めまして、この街の市長、アダムズです。まずは捕縛について代表してお詫び申し上げます。」

そう言つて歩み寄る30代後半の男性の後ろに89式が置いてあるのを見逃さなかった。

（誤つて発砲したな！？）

5人の視線を感じたらしい市長はハハハと苦笑いしつつ、すまなそうに壁を指差したのだった。

が、とりあえず自己紹介だと割り切り口を開いた。

「私は坪井翔平と申します。」

「後ろの4人は部下です。捕縛についてはこちらの対応にも非がありますので特に追及はしません。」

「そうですか。ありがとうございます。」

「あの・・・この鉄の棒について教えて頂けませんか？」

そう言つて顔を覗かせたのは捕まえられた時の指揮官だった。

「えっと・・・、その前に私達を馬車に連れてってもらえませ

んか？」

「大至急しなければなら無いことがあるんです。」

「ええ、いいですよ。」

市長の許しを得た坪井は3人を馬車へ向かわせギリギリの定時連絡を、自分は89式小銃の説明を始めたのだった。

一通り89式と自分達の説明（ホールや転移のことは伝えずはぐらかした）を終えた時、黒川が呼びに来た。

「隊長、どうやらもう向かっているそうでした……」

「へっ!？」

「それで、司令が引き返させるのが面倒だから市長から部隊が街に入ってもいい許可を取れ。だそうです。」

「……はあ。」

「えーと、アダムズ市長。こちらに我々の後続が向かっているそうなんですが街に入ることと、その前広場を使わせてもらう許可を頂けないでしょうか？」

（そう簡単に下りる訳ないだろうな……）
と内心思いつつも聞くと

「いいですよ。」

という返事で正直、面食らったのだった。

「分かりました、では20分程で到着するそうなのでよかったです――
緒に外で待ちませんか？」

「そうですね、分かりました。」

こうして救出部隊あらため、「自由貿易都市カイバル分遣隊」が送られてきたのであった。

カイバル？（後書き）

御意見・御感想をよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0718y/>

異星の日本国

2011年11月16日13時19分発行